

## 優秀賞

小さなフェルトアニマルから

香川県 比地小学校 六年  
中下 心結

私の机の上には、ふわふわした羊毛フェルトでできた、しまうまのぬいぐるみがちょこんと立っています。手のひらにのるサイズで、手作りなのにちゃんと立っていて、かわいいです。そして、それにはハンドメイドを証明する手書きのサインが書かれています。私には「Eliza」と手書きで、「Nairobi, Kenya」と英語で表記されています。遠くケニアからの手作り品かと思うと、なんだか愛着がわいてきます。

どうして、そのフェルトアニマルが私のところにやってきたのかというと、以前、「“マトマイニ”支援に協力を!」という話を聞き、私とお母さんは相談して、いろいろな動物の中からしまうまを選び、それを買うことで、協力することにしました。「支援」「協力」という言葉に、私は「小さな親切」だと思いました。

注文してからしばらくして、天候不順のための水不足、電力不足の上、施設のトラブル（へいをこわされる）などで、生産が遅れていると連絡がありました。だからか、届いたときには、国境を越え、はるばる届いたのだ、との思いから、より大切にしようという気持ちになりました。

この一体を買うと、ケニアの作成者の一日半の生活支援になるということもわかり、なんだかいいことをした気分になりました。かわいいしまうまを見ていると、これをチクチクぬいながら何を考えていたのだろう、Elizaさんはどんな生活をしているのだろう、と疑問がわいていきました。“マトマイニ”やケニアのことを調べてみたくくなりました。

マトマイニは、ケニアの NGO で、孤児やストリートチルドレン、貧困の子どもたちを支援したり、スラム街のシングルマザーたちの自立援助活動をしたりしています。それがフェルトアニマル作りなのです。その収入が、自立への道につながるそうです。

調べていくうちに、アフリカの中で比較的経済状況がいいとされているケニアでも、貧富の差が拡大し、ストリートチルドレンや孤児が増え、子どもたちの成長がさまたげられているという現実を知り、のほほんと生活している私とは比較にもならない世界にあせんとしました。

同じ世界にいる同じ人間が、こうも違う生活をしていて、たまたま日本に住んでいる私が買うことで支援するのは、本当の親切なのだろうか？ 知れば知るほど、これを「親切活動」というのには申し訳ない気持ちも出てきました。

本当は支援したり、されたりする側という差があることにも疑問を持つけれど、今の私には、心を痛めながらこういう困っている人に、このような形で思いやりを表現するしかできないなとも思いました。

学校で聞いた「SDGs（エスディーゼズ）」には、今回関係する事柄がたくさん当てはまることも気づきました。今の私は大きなことはできないけれど、自分が今できることは何かを考えつつ、チャンスが来たとき、積極的に取り組んでいけるよう知識を広げ、勉強していきたいと思いました。考えを深めさせてくれたケニアの Eliza さん、アサンテ（スワヒリ語）。